部門ごとの審査講評

洋画

過去の図録を拝見して、特定の型にはまった作品が少なく、多様な表現傾向があると認識していたが、今年度の出品作も期待に違わぬもので、興味深い審査会であった。

具象的な作品では再現性が一様に高いレベルを見せていたこと、それから描写スタイルに関わらず、全体的に構図に破綻の見られる作品が少なかった。この点は、写真を参照することが想定されるが、すでにAIの使用も含めて、現代ではそれは前提として考えるべきであろう。

写真の使用という点では、インターネットでいわゆる「映える」画像が簡単に入手出来るうえ、多くの方が世界各地を訪ねる機会も増えたこともあって、海外の風景や風俗を取り上げた作品が多い印象であった。また、そうした作品があるだけに、自身の日常から主題をすくいあげてきた作品のリアリティの強さや温かさというべきものが目に付くことにもなった。

そのような傾向ゆえ、一見稚拙に見える描写の作品を、より注意深く見るように努めた。その際には、作品タイトルも併せて考慮し、その作者の意図がいかに明確であるかを、くみ取ることに努めたが、絵を描く喜びが、見る側にも素直に多幸感を与えてくれる良作が複数あった。

全国的にも、県展では、各種公募展の状況と美術系の大学の有無が、その様相を規定しがちだと思う。その点、私は全く状況がわからないのだが、冒頭に述べた近年からの傾向からして、多様な表現が包摂的に受け入れられていることは鳥取県の特色とも言えるだろう。

さらに今回は、線描とわずかな陰影で示された小さな四角形が画面全体をリズミカルに埋め尽くす《白磁色についた痕跡》、そして緻密な有機的文様が、やはり画面全体を巧みに覆う《雨のイスタンブール》のような抽象的な傾向の作品が県展賞となったことは、70年の節目の年の特徴であると言えよう。

（講評者　大原芸術財団 シニアアドバイザー　柳沢　秀行）

日本画

日本画部門は今年から県内審査員2名と県外審査員２名での審査となった。出品点数は昨年より増え27点。予め定められていた審査手順と入選点数に従い、「独創性、制作意図の明確さ、的確な技術表現、作品の完成度、芸術性の高さ」という５つの観点から厳正な審査を行った結果、19点が入選となった。昨年と同様、人物、風景、動物、静物などテーマが多様であり、水墨画も少なからぬ出品があったことを記しておく。

県展賞に選ばれた《残響》は、ヘッドホンをして何かの音に聞き入る人物を中央に据え、「音」をテーマに絵画化した独創的な構想による作品。箔を用いた木の幹の重厚な表現と紅葉の鮮やかさが好対照をなし、人物の心境と背景をシンクロさせた構成に力量が感じられた。

奨励賞の《まなざし》は、こちらに眼を向ける赤ん坊の愛らしい瞳、優しく赤ん坊を見つめる母親、この二つの眼差しが作品のテーマであり、作者の思いが素直に伝わる優作である。同じく奨励賞の《予感》は青柿の葉や実と猫とを組み合わせた生命感あふれる清々しい作品であり、色彩の美しさが目を惹いた。受賞候補となった《森の守り神》は大切に守り崇められている神木を重厚なタッチと色彩で描き、背景の深い青も相俟って荘重な雰囲気を漂わせている。《旅、オアフ便を待つひととき》は、タイトルを聞いて合点がいった。新聞紙の上で花札に興じるアロハシャツを着た４人。画面構成と色彩のバランスが秀逸であった。《残雪》は色づかいと写実的な描写に力量が感じられた。雪解けにより露わになった地面や、画面奥の木々に春の息吹が感じられ、日本画の真髄とでもいうべき季節感が巧みに表現されているように思われた。

入選作も、惜しくも入選とならなかった作品もそれぞれに創意工夫が凝らされ魅力的であった。今回で記念すべき70回目を迎えた歴史ある鳥取県展。出品された皆さまの今後ますますの活躍を期待します。

（講評者　兵庫県立美術館 課長　飯尾　由貴子）

版画

昨年の第69回県展につづいて、というよりも例年どおりといえそうだが、今回も全体的に木版画によるブラック・アンド・ホワイトの具象作品の応募が多かった。そのような出品作の特徴には、倉吉で活動した民芸運動の版画家であった長谷川富三郎の遺産が受け継がれているようである。

審査は委員の票が割れることなくスムーズに進行し、基本的に造形的に完成度の高い作品が評価された。それは、版画制作期間の長さに比例しているように思われる。まだ制作経験が少ない応募者でも、絵の見方や版画制作の技術を磨くことによって作品は良くなって行くので、ぜひ継続して制作されることを希望したい。

入選作品のうち、まず、県展賞受賞の≪立夏≫は、応募作品のなかでひと際目を引いた。色彩、造形、構図などに表現力があり、全審査員の得点が高かった。奨励賞の≪刻の聖域≫は応募作品の中では唯一のエッチング（銅版画）でかつ表現内容も異なる傾向のもので、ある意味、その独自性に評価が集まった。賞候補の≪東郷池≫は細部にも目が行き届いた写実的な風景版画で、丹念な造形性や空間性に魅力を感じた。それ以外の入選作も個性的な表現が認められ、今後の展開が期待できる。

以後の応募作品への希望として、木版画以外の版画や抽象作品、色彩を駆使した版画の出品を期待したい。

（講評者　新潟市美術館 特任館長　滝沢　恭司）

彫刻

昨年に引き続き審査に加わったので、同一の作者の手による作品が複数認められた。何れも、手練れでありながら、熱意を失わず取り組まれていることが感じられ、心引き締まる思いがする。今年は、一般応募出品数は13点と微増、しかしその中には、新しく挑戦者として加わったと思われる作品もあり、うれしい気持ちになる。この彫刻部門は、幅広い素材と技法が自由に用いられる可能性がある一方、同時に素材の理解と技法についての習熟には、ある程度の時間がかかる。制作の機会が多い絵画や写真などに比べ、完成度が気になり、出品を思いとどまる傾向がある。このようなことから、出品総数が少なくなり、結果として美術館に展示できる作品数を限定的なものにしている。今回も、作品にとって一番大切な挑戦が感じられるにも関わらず、展示することができず、とても惜しいと感じた作品があった。無責任に響くかもしれないが、がっかりしないで、制作すること、そしてそれを出品すること、挑戦を続けて欲しい。そう多くの審査員が願っていることを、この場を借りて伝えておきたい。

さて、ここでふたつの奨励賞作品について触れておく。≪ⅡⅠⅡⅥⅧⅡⅡ≫は、私の憶測が正しければ、はじめにも触れたが、昨年も出品し、県展賞を受賞した作品と同じ作者だ。この作者は、ひとめでは意味が把握できないような立体物を、人はどのように認識するか、それが時間を経てどのように変化するかということを、明らかにすることを楽しむ人だ。人の癖を読みながら、鑑賞者がまんまとその読み通りにはまっていくことを楽しんでいるようにさえ見える。≪ ICARUS BABEL　…SPHINX ≫は、翼を持つ飛行機やイカロス、塔や顔というイメージの立体物が引き連れてくる言葉の連想だ。そのような、それぞれの部分が持つ瞬時のあきらかさから、今度はそれらが組み合わさった時、遅れてやって来る、新たな不穏な感覚が目指されている。ふたつの作品は共に、物質が意味のある形状を伴う立体作品となることで、彫刻という媒体の可能性を開拓していると言える。

（講評者　美術作家　松井　紫朗）

工芸

工芸部門には、県内各地域から昨年より７点減となる34点の応募があった。県下全域を対象とする県展であることからも、応募点数の減少は大きな課題で、県民諸氏の参加を促す手立ても考えねばなるまい。作品は、陶芸、染織、木竹工、ガラスのほか、木彫りの置物や樹脂製の仮面、押し花額などがあり、工芸として評価し得るものか？他に受け皿がないとは言え、戸惑うものもあった。審査員4名は今一度、工芸とは何か、に立ち返り、昨年同様「作品の完成度」「技術の確かさ」「独自性」を基準にまずは1点1点を確かめ、その上で１～５点の点数を入れた。定められた入選率に従い、残念ながら10点が選外となり、上位８点を賞候補として再投票を行い、獲得点数と協議の上、県展賞２点、奨励賞３点を決定した。

総じて陶芸は、粘土で形を作る、という基本は出来ていても、作品の内側、裏側まで気を配っているか？施釉や絵付けは魅力的か？どこに独創性が見られるか？といった点で「一歩及ばず」な作品が多かった。染織は染め、織りともに勢いがあり、制作者の意気込みが感じられた。タペストリー作品は、タペストリーとしての仕上がりを意識した文様の配置を考えてみてほしい。竹工は各々編組に工夫が見られたが、技術面でのツメの甘さが気になった。そうした中、県展賞に選ばれた2点は群を抜いて完成度、技術力、独創性に秀でていた。《経緯絣木綿着物（舞）》の作者は昨年に続く連続県展賞受賞となった。藍地に映える経緯絣の繊細な交わり、文様のオリジナリティーが高く評価された。また《埋没材造拭漆盛器》は、拭き漆で仕上げられた端正で美しい杢目は欅だろうか。落ち着いた杢目に対し、造形は十角形で薄く手取りも軽く、よく見ると十角形の縁の内側を弧に削り、輪花のように見せるなど手の込んだ仕事ぶりがうかがえる。欲を言えば高台に工夫の余地があるか。作家の皆さんには創作を楽しむとともに「美しいものを創る」という意識を高め、研鑽を積んでいってほしい。

（講評者　岡山県立美術館 副管理者　福冨　幸）

書道

本年度の書道部門には意欲的な書きぶりの作品が多く頼もしさを抱いたが、類型性が多見され個性や内容に寂しさもあった。審査では甲乙つけがたく、採点には苦慮した。

県展賞に選出された王維の詩「過香積寺」。書き出しの「不知香積」は叙景詩を象徴するかのような生気に満ちた筆勢と骨趣で傑出。前半はこれを受け生動感に満ち、線質の練度も高く行間の余白も充実して見事。後半はやや窮屈、気宇や構成にもう一工夫が欲しかった。また末尾の「安禅制毒龍」も少々固くなっており勿体ない。首尾の「不知」に呼応できれば最高と思量する。

同じく県展賞の「おもひ」は線質の高さと連綿の自在感で抜きん出ている。特に末尾の運筆は見事で、その書きぶりを見ていると次第に読んでその境地に引き入れる魅力がある。古筆に裏打ちされた格調の高さがある。ただ渇筆部分は流麗で良いが、墨の多い長い行では硬直気味になっており惜しまれる。料紙と墨色にはこだわりたい。

その他、秀逸な作品もあったが、以下全体に関して評する。

１．個性と類型性について。これは畢竟、吟味と推敲の量と質に相関する。如何に書くかというhow toに終始するのでなく、何を表現したいのかというwhatとactuality、何故自分はこのように書くのかというwhyとbecauseを自作に問いつつ相克的に制作する。借り物ではなく、真剣に個性を磨くことである。

２．行と行間の構成について。脈々とした自律的な行の妙味、行と行との呼応、行間の余白の密度に秀でた作品が数点あった。他方、行頭に比して行尾が虚弱、竜頭蛇尾の感の拭えない作も多見された。脚部や裾は格調に繋がるだけに重視したいもの。

３．用墨について。運筆の提・按と疾・渋の調整で、品位のある渇筆を求めたい。濁った渇筆は意余っての瑕疵なのか。何れにせよ濃墨に頼った筆力は品位を落とす、要注意である。

最後に、常連の方にはさらなる新生面を、新たに挑む方には次代を担う気概を発揮され、本展の益々の活況を期待している。

（講評者　広島文教大学 名誉教授　日比野　貞勝）

写真	初めて鳥取県美術展覧会の審査に参加したが、一見して他県と比較して高い水準にあると感じた。この質の高さは、偶然の産物ではないだろう。本県には、芸術写真の草分けである塩谷定好や、独自の表現世界を確立した植田正治をはじめとする巨匠や諸先達たちが築き上げた、深く豊かな伝統が脈々と息づいている。出品作の一枚一枚から、その輝かしい系譜を受け継ぎ、日常の風景や被写体に潜む美を鋭く穿ち取ろうとする強い探求心と基礎力の高さが伝わってきた。 一方で、伸び代も感じられた。これは他の審査員もおっしゃっていたことでもあり、また他県とも共通するのだが、良い写真にも関わらずタイトルが効果的でないものが多い。言葉との組み合わせ次第でさらに輝きを増す可能性を秘めたものが少なくなかった。もし題名が写真の持つ世界観と深く引き立ち合い、互いを高め合う関係を築けていれば、自ずとより評価されたはずである。 写真は視覚の芸術であるが、そのイメージだけでは解釈は多様に開かれ過ぎている。タイトルや作品に添えられた言葉によって、その作家の教養や自己の作品及び、美術史や芸術史についての理解度が見えてしまう。古今の写真家や芸術家たちが、作品にどのような思想を込めて題名を命名してきたか、その歴史や知性から学ぶ姿勢は、今後の作品全体を洗練させる大きな糧となるだろう。単なる説明やありきたりな表現に終始せず、言葉と映像が相乗効果を生み出す視点を獲得したとき、作品の魅力はより深く鑑賞者の心へ届く。そのためには常に考え続けることと、写真に限らず様々なジャンルの名品に触れる機会を持つように心がけていただきたい。 鳥取の地に根ざした確かな伝統と、出品者の高い美意識が融合した本展は、今後の発展を大いに期待させるものだった。自身の眼差しを磨きつつ、言葉との調和あるいは言葉による飛躍に心を配ることで、鳥取の写真表現は更なる高みへと羽ばたいていくに違いない。 （講評者　京都芸術大学 教授　勝又　公仁彦）
デザイン	応募作品は大多数が平面作品であり、ビジュアルデザインに集中した。日頃からディスプレイ越しに情報をキャッチして思考することが当たり前になってきており、視覚への訴求がより一層、創作の関心事となっている。材質や手法はさまざまで、機知に富んだ仕立てから、詩的な訴えまで、タッチの多様さが窺えた。 デザインは、作者の自己表現にとどまらず、テーマの適切な伝達によって初めて成立する。審査では、各々のテーマをそれぞれに相応しい手法で的確に伝えているかどうか、視覚的表象と言語的メッセージのバランスに注目した。テーマの選択については、身辺の観察に基づく哲学的な発見から、地球規模の自然環境問題まで、いずれも個と社会の関係性を鋭くもユーモラスに問いかけており、想像力豊かに時代性を捉えていた。全体に通底するモチーフは、テクノロジーへの向き合いである。デジタル技術を制作に駆使するのみならず、概念として導入した作品や、機械的な反復や疎外感に抵抗するようなノイズを意図した作品が眼をひいた。また対極的に、画材を活かした緻密な風合いや、異素材の組み合わせによって存在感を示す作品が目立った。手作業の労苦や制作の喜びに溢れるものが多いが、仕上げる前に今一度、冷静に全体の構図を意識して見直すと、完成した姿はより説得力を増すだろう。 今回、AI生成画像と推測されるビジュアルを用いた応募作品があり、審議対象となった。作品には、作者自身のものを見るレンズを伴っていることが肝要である。そうでなければ、創作者としては極めて思考停止に近く、誰かに与えられた評価基準のみにとらわれた、受け身の態度の表明と見なされる。何かをなぞって綺麗に創作することが、デザインの本質ではない。物事の奥行きを照らし、現在はまだ意識されていない潜在的な課題を見出し、その解決に向けて新しい視点や価値観を提示すること。それこそが、デザインの原点であり、独創性である。 （講評者　パナソニック汐留美術館 学芸員　川北　裕子）

部門ごとの審査の観点

洋　画	1．独創性　2．制作意図の明確さ　3．表現技術の確かさ　4．作品の完成度
日本画	1．独創性　2．制作意図の明確さ　3．的確な技術表現 4．作品の完成度　5．芸術性の高さ
版　画	1．作品の完成度　2．制作意図の明確さ　3．独自な表現　4．新鮮味
彫　刻	1．造形力　2．独創性
工　芸	1．作品の完成度　2．表現技術の確かさ　3．独自な表現
書　道	1．作品の総合的な完成度　2．書表現における技術の練度　3．独創性表出の度合い 4．文字性に対する理解
写　真	1．作品の完成度　2．作品の独創性　3．作品の表現力　4．作品の見せ方
デザイン	1．創造力　独創力　2．表現力　造形力　3．技法と技術力　4．テーマ性の理解と考え方 5．完成度　6．社会性と時代性